

あとかき

著者は1958年に大学に入り、中国語の学習を始めた。当時は「60年安保」の時代であったから、「デモ暮らし」に忙しく、語学は身につくところまでは至らなかったが、人民公社の理想については、いやというほど語り合った。まもなく人民公社の破綻が明らかになり、文化大革命に突入した。そして文革が破綻し、改革開放が始まった。台湾・香港・シンガポールから改革開放を遠望していた著者は、「改革開放の風は、南から吹く」とばかり、追い風に吹かれながら、その行方を見つめてきた。1958年から数えると、すでに半世紀を経た。1978年の改革開放から数えても30年だ。そろそろチャイナ・ウォッチングの結論を急いだほうがよい。そのような思いでキーボードを打ったのが本書である。

マルクス主義者たちはユートピアを「空想的社会主義」と批判し、自らの「科学的社会主義」なるものを対置したが、21世紀初頭の今日、誰もが理解しているのは、この自称「科学的社会主義」もまた一種のユートピア幻想であったこと、否、あえて言えば、「ディストピア」でさえあった事実である。北朝鮮で行われている政治経済は、その究極の一例と見るべきであろう。G・オーウェルの『1984年』は、紛れもなく今日の現実だ。中国の民は、長い試行錯誤の末に、いささかの自由を得て、現代資本主義における「市場的搾取」を反面教師としつつ、現代社会主義における「原始的蓄積」に挑戦した。そこで明らかになった真実は、「市場的搾取には限度がある」が、この「原始的蓄積には、およそ限度というものがない」ことであった。

1958年当時、中国の止揚すべき対象は、「国民党官僚資本主義」であり、その悪弊であった。中国共産党は、この体制を打倒して、資本主義を社会主義に変革することを公約した。半世紀後の今日、その中国イメージは、日に日に「共産党官僚資本主義」に変身しつつあるのを否めない。中国共

産党による革命の帰結は、どうやら「共産党官僚資本主義」の再構築であったように見える。

「国民党官僚資本主義」の時代には、明るい希望の光が見えていた。これをきびしく批判する共産党が人々の期待を担っていたからだ。いま中国はなぜ暗いのか。かつての共産党のような、人々の期待を担う政治勢力が見当たらないからであろう。

*

蒼蒼社中村公省さんとの二人三脚で [図説] の最初の試みを行ったのは、『[図説] 中国の経済水準』（1986年12月、蒼蒼スペシャル・ブックレット）を作った時であった。その後、1992年8月に『[図説] 中国の経済』を出版し、1994年1月にはその増補改定版を出版した。この本がアメリカの若き中国通スチーブン・ハーナーの目にとまり、英訳された。*China's New Political Economy: The Giant Awakes*, Westview Press, 1995. である。スチーブンと中村および矢吹とのつきあいについては、「第二版あとがき」で彼自身が説明している。

増補改定版から4年後、すなわち1998年2月にデータを新しくするために、『[図説] 中国の経済』（第二版）を出した。これは増補改定版の英訳者スチーブンとの共著とした。当時、彼は上海に居を移してお雇い外人として、金融界で働き始めていた（現在は深圳にある平安銀行の監査役だ）。

実は「第二版」は、*The Giant Awakes* が好評であり、その書評に肩を押されて編集したのである。たとえばアメリカ図書館協会（American Library Association, ALA）の雑誌 *Choice* 誌（January 1996）によって、Outstanding Academic Book for 1995 に選ばれ、矢吹の知るかぎり8篇の外国語書評（英仏伊）が出て、注目を集めた。<http://www.ala.org/ala/mgrps/divs/acrl/publications/choice/index.cfm>

これらの書評や読者に励まされて *China's New Political Economy: Revised Edition*, Westview Press, 1998. をスチーブンとの共著として編集したが、その日本語版が「第二版」であり、両者はほとんど同時進行の形で進められた。

この Revised Edition を高く評価して、長文の書評を書いてくれたのは、James A. Dorn 教授であった。すなわち *The Cato Journal*, Vol. 20, No.

3, Winter 2001. 掲載の書評である。(Cato Institute <http://www.cato.org/pubs/journal/cj20n3/cj20n3-12.pdf>)

後日、経団連の招きで来日した同教授と一夕懇談したが、中国に対する現状認識の点で驚くほど見方が一致し、意気投合したことを記憶している。

「第二版」以後、中国経済はいよいよ、目覚めた巨龍が立ち上がり、世界をゆさぶることになった。この間、中国経済についてまとまった本は書いていないが、21世紀中国総研編『中国情報ハンドブック』(各年版)では、毎年、何らかのものを書いてきた。本書のいくつかの章には、2008年版および2009年版の旧稿が用いられている。しかし、その後の発展を踏まえて修正しつつ用いているので、特に断り書きをしていない。

中国経済が勢いよく発展しているのは、本書がさまざまな角度から明らかにしたように疑うべくもない事実であり、今日それを否定する者はほとんどあるまい。しかし、中国において望ましい経済発展が実現しているか、と問われるならば、著者の答はノーである。

本書を通じて、読者のみなさんに中国経済のどこに問題があるのか、そのオルターナティブは、何なのか。それを考えるヒントを読み取っていただけのならば、著者にとって望外の喜びである。

2010年1月 著者記す